

創刊の辞

熊本県立大学学長 梅林誠爾

熊本県立大学文学部の知のこころみを、ジャーナルのような形で地域社会に向けて発信してみてもどうかろう、それは地域の文化の営みと大学との交流を促し、また県立大学文学部に対する辛口甘口の様々な批評を得る機会ともなり、学部教育・研究にとつてよい刺激となるはずだ。二年ほど前、学部の将来像を検討していた委員会において、そうした提案がなされました。確か提案者は、日文の鈴木助教であったかと思えます。意見の一致を見るまでにかかなりの時間がかかる文学部で、この提案はめずらしく早々と賛同が得られ、雑誌名『文彩』も決まり、このたび創刊の運びとなりました。

大学というところは、普遍的な意義を持つ文化を扱うのであって、一地域の特殊な文化など問題にならないという考え方が、私自身の中にもいつの間にか住みついていたように思います。しかし、大学における教育や研究も、地域に受け入れられてこそ、現実に普遍的な価値を持つと言えます。また、一地域の特殊な文化の中には、普遍的・人類的に価値あるものが必ずあるはずであり、そこに光を当ててすることは、地域にある大学の重要な仕事であるように思われます。

先日（十一月二十六日）、本学文学部主催によるフォーラムが開催されました。学習院大学の吉田敦彦教授には、「人文知の未来」と題した講演を快くお引き受けいただき、また、パネルディスカッションには、パネラーとして、文学部教員の他に、松尾正一熊本日日新聞社文化生活部次長、緒方洋子くまもと県民交流館館長に参加していただきました。吉田教授、松尾次長、緒方館長のお三方とも、熊本県立大学文学部がその知を携えて地域社会に打って出ることを切望され、また、阿蘇霜宮神社の火焚き神事の由来や松本喜三郎の生人形などに触れながら、地域の文化の中にある価値あるものにもっと注目していくことが、人文知の未来にとって大切であると、強調されていたように思います。

今回の『文彩』の創刊が、地域において文化や教育の営みに従事されている方々、また言語文化に関心を寄せている高校生などの若い人々、そうした人々と県立大学文学部との交流の足掛かりとなり、そこから、共同の知の営みが生み出されることを期待しつつ、『文彩』創刊に寄せる言葉といたします。（二〇〇四年十二月七日）